

世田谷村日記

石山修武

八月二〇日 つづき

ワークショップ六日目 第一講中原大学黄先生コートヤード。

第二講伊東豊雄。第三講安藤忠雄。伊東豊雄のレクチャーはその構成が実に見事だった。メキシコの建築家オゴルマンによる典型的モダニズムの事例から、画家でもあった彼がたどったライフスタイルと絵の中に棲むという自分のアイデンティティの表明。絵を描く自分と建築を作る自分との対面そして自己分裂。次に

チャールズ・イームズ自邸。表現をしない表現。自分の表現を消してゆく表現の可能性。繰り返し彼が述べていたモダニズム建築の支持層の薄さの問題点は重要だ。かつてトム・ウルフがバウハウス批判グロピウス批評をした、単純なポピュリズムに陥らない方法が本当にあるのか。表現しない表現という可能性が建築家によつてなされるのか。どうやら伊東豊雄は困難な問題を引受けようとしているようだ。ベルギーのプロジェクトはそんな問題を拓くものになるかも知れない。メディアテックの先に歩き始めている伊東豊雄を見た。

安藤忠雄のレクチャーはいよいよその人間の際立った大きさ、特異さにみぎがかかってきた。司馬遼太郎記念館の白いステンドグラスのアイデアなどは安藤が新境地を開き始めていることを物語っている。すでに仕事を獲得することに思い悩まずに、自在な自分を表現する楽しみの中にいることがわかる。又、誰も彼のような語り口で自己の仕事を語ることができない。モダニズムが

その発生時から所有していた問題、支持基盤の薄さという問題に安藤も又その人間全体で対峙している。

ソウル大学の梁銑在先生、建築家の高橋晶子さん到着。夕食を共にする。

八月二一日

ワークショップ七日目。

第一講梁先生、第二講高橋晶子

午後、中間講評会。バウハウスの学生の、単純に言えば誠実さが際立っている。何故か。このワークショップも五回目で、二回生三回生と連続して参加している学生も多い。彼等の進歩が楽しみと言えば楽しみであるが、総体としては良くない。

八月二二日

今日は昨日に続いて中間講評会。グループ設計の作品に対応する。良いモノが出てくれればいいのだが。W・B子供のためのIT教室今日から開講。